

Title	同人誌『友愛』からみる「日本語人」の植民地教育による影響
Author(s)	陳, 麗華
Citation	大阪大学言語文化学. 2009, 18, p. 3-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77820
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

同人誌『友愛』からみる「日本語人」の植民地教育による影響*

陳 麗華**

キーワード：日本語人、言語政策、植民地教育

The Japanese-speaking generation (JSG) is called "Nihongojin". Taiwan as a part of Japanese empire from 1895 to 1945 still remained a small quantity of Japanese-speaking people, they are educated when Japan governed in Taiwan and they were greatly influenced by Japanese culture, art, literature and other affairs. Generally, before 1945, the JSG had studied in schools with Japanese no matter both in junior higher or college and in Japan or Taiwan; besides. It is worth to mention that the terminology of "Nihongojin" was revealed by poet Makoto Ooka in the introductory of “台湾万葉集” in 1994.

After the WWII, Taiwan was reigned by Kuomintang (KMT). On the policy of “National identity”, the ruling party, KMT, wiped out Japanese culture and enforced Sino-centric policy in educational territory and social activities in Taiwan. During the period of Martial Law implementation, from 1949 to 1987, there were no freedom on political speech, assembly, human rights; similarly, both Japanese and local language such as “Minnan” were prohibited in public by central government. However, when Martial Law was rescinded in 1987, the multiple cultures were pursued by people again, and Japanese language was renaissance as well. The JSG is tide over the time of political turmoil and recover the way of their enjoyment.

The main objective of this article is to study the “Influence of Colonial Education” on JSG by way of analysis on the essays in the magazines of “You & I (友愛)” (“togetherness” in Chinese) which published by the “You & I” Group and the most readers and literary works is JSG. The “You & I” group was established in 1992, and nine volumes of “You & I” were published totally. It is value to point out that the members of the “You & I” group possess diversified backgrounds; they wrote the articles which related to their histories and experiences of the life and mission with elegant Japanese. Per the “content analysis”

* From the Contents of YOU&I Magazine to Analysis the Influence of Colonial Education on Japanese-speaking Generation in Taiwan (CHEN Leehwa)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

on the "You & I" magazines that we can understand how JSG feel about Japan's matters and find out the ideas and sentiments of them on Japanese life.

1 はじめに

1949年から1987年までの戒厳令期間、台湾では公の場で一部の言語が使用禁止とされていた。それはエスニック言語¹⁾と元宗主国言語の日本語に対する抑制である。このときの台湾社会は中華思想を主流とした言語政策が実施され、台湾固有の文化や日本統治がもたらした「日本色」は軽視されていた。戒厳令が解除された今日、言論の面では自由な社会となり、また、言語の面では中国語²⁾をはじめとしてエスニック言語、それに日本語、英語など様々な言語が使われているだけでなく、多言語政策が教育機関で執り行われるようになった。

このような社会的な変遷の中、いまなお日常において日本語を話し、読み、そして書くときに日本語で使いこなす80才前後の年配者がいる。台湾が日本に統治されたとき(1895-1945年)に彼らの多くは中等教育以上の教育レベルを有する人たちである。しかし、これまでの台湾では彼らを指す適切な表現がなかった。単に「日本教育を受けた人たち」(中国語では「受日本教育的人」)ということばで呼んできた。本稿は植民地教育を受け、今も意思伝達や物事の描写をしようとするときに、中国語より日本語の方が表現しやすい言葉である人々を、大岡信の表現を借りて「日本語人」³⁾とよぶことにする。

戒厳令解除後に日本語同人誌『友愛』に投稿した彼ら「日本語人」のエッセイを次の観点から分析するのが本稿の目的である。

- (1) 統治終了後、彼らがその日本語能力を保持してきた理由は何か。
- (2) 植民地教育を受けた「日本語人」は自分の人生をどのように受け止めているのか。
- (3) エッセイを通してどんなことを訴えたかったのか。

2 「日本語人」の歴史的背景

「日本語人」を生み出すに至った背景となる台湾社会の変遷について以下に述べる。

2.1 言語政策不在の時代(1895年以前)

¹⁾ 漢族のピン南語、客家語及び先住民各部族の諸言語を指す。

²⁾ 戦後、台湾の国語である。台湾で話されている中国語は一般に言う北京語に当たるが、エスニック言語の影響などで中国の北京語と少し異なっている。

³⁾ 「日本語人」という呼び方が初めて使われたのは『台湾万葉集』(1994)の序文においてであり、その序文を書いた詩人の大岡信である。大岡のいう「日本語人」とは植民地教育を受け、日本語で詩歌を作れる高い教養のある台湾の年配者たちのことである。

日本統治前、台湾は地理的に清朝管轄下の一省ではあったが、実質的に辺境地域として見なされていた。民族構成は17世紀までにすでに台湾に棲みついている少数の先住民（マレ・ポリネシア系民族）及び17世紀のオランダ統治から19世紀始めまで中国の福建、広東から渡ってきた漢族（ビン南人と客家人）とされる。それぞれのエスニック言語には大きな隔たりがあり、互に通じず、所属のエスニック・グループの地域内で暮らしていた。

一方、清朝には共通語としての「国語」という認識がなく、言語政策がつくられなかった。一部のエリートに限って官僚の言葉⁴⁾を用いることができた。官立の「書院」や民間の「書房」は教育機関として存在したが、これらは科挙の準備及び上流階級の教養として中国の漢文を伝授する役割を担っていた。統計によると在籍者数の最多の1898年は学齢児童数の約5%占めていた⁵⁾。このように教育の普及は行き渡っておらず、識字率も低かった。

2. 2 言語政策実施の時代

これまでの台湾の言語政策を歴史的に振り返ると、三つの時代に大別できる。

(1) 植民地時代（1895－1945年）

台湾人を日本帝国の「臣民」とするために、同化政策の一環で日本語を国語とする教育が実施されていた時代である。日本は日本語を台湾人に習得させるために、1912年より学校における母語の使用を禁止し、その一方で、近代化教育制度を整えていった。このことにより、台湾人の教育レベルが高まっただけでなく、各エスニック・グループ間のコミュニケーションが日本語によってとれるようになった。1944年の植民地終了直前、日本語理解者数は71%に達していた⁶⁾といわれている。

(2) 中華民国への返還から戒厳令解除まで（1945－1987年）

1945年日本の敗戦により、台湾は中華民国に返還され、政権を握っている国民党の言語政策は「中華思想」をナショナリズムとして、早期に日本文化を払拭し、台湾を「祖国化」させるのが目的である。1944年の返還前にすでに重慶で台湾調査委員会が組織され、「台湾接管計画綱要」の通則第7条には「接收後、公文書、教科書、新聞では日本語の使用を禁ずる」と書き記されている⁷⁾。さらに、国民党政府が1946年新聞、雑誌の日本語記事を廃止し、1947年に全面的に日本語の使用禁止を定めた。このような

4) 官署で話されている公用語である。清朝の場合、北京を首都としたため、現在の北京語に近い「北京官話」が官僚の言葉として使われていた。

5) 磯田 2005、p.6

6) 王育徳『台湾－苦悩するその歴史－』弘文堂、1970年、p.133

7) 何義麟 2007、pp.59-61

状況下において、新たな国語である中国語の習得は、当時においてはすでに中学校以上の植民地教育を有する人（「日本語人」）にとっては克服しなければならない大きな課題となった。

(3) 戒厳令解除後（1987年以降）

1980年代、民主化を求める声が高まったことにより、戒厳令が解除された。台湾社会では言論が自由になる一方、エスニック意識が強まりつつあった。1990年に政権交代が行われ、政府（民進党）は世界と台湾とのグローバル化を目指して多言語政策を実施するようになった。

一方、「日本語人」は言語使用の制限から解放された。台湾社会では日本のサブカルチャーがブームになったのを契機に、日本のメディア情報や書物が簡単に手に入るようになった。彼らの一部が日本語の愛好会を結成し、自らの歩みを回顧しながら、同年代同士で自らの人生体験の共鳴を求めようとした。

3 先行研究における「日本語人」とその問題点

これまで、日本語を話す年長者に関する年齢層、言語の使用状況及びその意識についての研究は甲斐（1996・1997）及び合津（2000・2001・2002）の考察がある。また、簡（2003・2005・2007）は今日においては異なるエスニック・グループの年長者が日本語を共通語（リンガフランカ）として使用していることに注目し、その言語的な特有性を明らかにした。しかし、これらの論文には「日本語人」という呼び方は見当たらず、「日本語人」に至るまでの背景についての考察も行われていない。

「日本語人」という表現を使いつつ、その存在の背景、特徴及び彼らの創作した日本語詩歌を考察した研究に黄と磯田がある。

3.1 台湾側の黄智慧（2003）の見解

黄は「日本語人」という称号を頻繁に使ってはいるが、その定義付けは難しいと述べている。彼女は「日本語人」について、次のように書いている。

高い日本文化の素養を身につけた旧植民地台湾の人々のことを「日本語人」〔中略〕。
この称号は〔中略〕台湾に限られている（p.116）。

黄は「日本語人」は日本語が得意だけでなく、日本文化を身につけた元日本人であった台湾人であるのが特徴だという。また「日本語人」と呼ばれる人々は、旧植民地の中では台湾に限定されていると指摘する。しかし、植民地であった台湾以外のアジア地域

では、なぜこのような称号が生まれてこなかったのかは説明されていないし、果たして、そうであろうか。旧植民地の中において、全ての元被統治者は今もなお批判的な考え方をもっているかどうか、幅広い調査が必要である。つまり、他の地域では「日本語人」が存在しないとは言い切れないと考えられる。但し、本稿は台湾に限定して、台湾の「日本語人」について考察を行う。

3. 2 日本側の磯田一雄（2004）の見解

磯田も黄と同じく台北にある文芸クラブのメンバーに聞き取り調査を行っている。磯田の論文には「日本語人」という称号を一度しか使わず、代わりに「台湾人」で彼らのことを指している。磯田の調査によると「日本語人」とは日本語を主たるコミュニケーションの手段として使う台湾人に過ぎず、彼らのもっている台湾人アイデンティティは日本化されていないと指摘している（p.8）。

つまり、磯田は「日本語人」とは単なる日本語という言葉の道具を使いこなす台湾人であると考え。しかし、言語がアイデンティティに影響を及ぼさないのであれば、植民地統治が終了したのち、日本語の需要が当然減ることになる。さらに、戦後60年が過ぎた今日においては、もはや日本語の使用にこだわらないはずである。しかし、「日本語人」というマイノリティが存在しているのである。そこで、本稿では「日本語人」が近年日本語で綴った同人誌『友愛』のエッセイを考察し、彼らが日本語を使い続けてきた理由を探る。

4 「日本語人」の言語意識と結社

4. 1 「日本語人」の言語意識

植民地時代には、日本語を常用していた人々もいれば、家族間では出身のエスニック言語と日本語の併用、公共の場では日本語といった具合に言語の使い分けをしていた人々（「日本語人」）もいる。また、彼らは台湾人としてのアイデンティティを忘れないように家族の年配者から漢文教育を授けられる。しかし、日本の教育を受けるにつれ、日本語も母語ようになってきたと述べる。少なくとも中等教育以上の学歴を有する彼らは、終戦を迎えるときには所属のエスニック言語より日本語の方が自らの考えを表現しやすかったとも書いている（柯徳三「祖父 柯秋潔のことども」pp.147-153、『友愛』復刊第1号）。彼らは戒厳令下で、公には日本語を使うことはできなかったが、家庭内ではその言語能力を保持し続けていた。そして戒厳令解除後には、それまで抑えられていた表現の欲求を満たすため日本語で自分史や体験談を綴り、詩歌を創るに至っている。

4. 2 「日本語人」による研究会（「友愛グループ」）について

「友愛グループ」（前身：「友愛日本語クラブ」）は1992年に7人の「日本語人」と3人の日本人協賛会員によって設立された。当時の台湾は日本語学習ブームの中にあっただが、正しく日本語を使える人が少なく、巷に奇怪な日本語看板と商品の意味不明な日本語説明が多く見られた。また設立の動機には日本人の日本語の乱れに対する危惧もあった。そのため、会の趣旨には「正しく美しい日本語を残す」という標語が掲げられている。現在133名の会員のうち台湾人99名が含まれていて、平均年齢は73才である⁸⁾。

この日本語愛好会「友愛グループ」は月例会を催している。例会の内容は会員の日本語によるスピーチを行い、日本語教師を招いて、日本語能力を磨いている。1999年より毎年一冊の同人誌（『友愛』）を発行し、2008年現在で9号まで上梓している。印刷部数は毎号500部であるが、1-4号は好評のため、2007年に各100部復刻されている⁹⁾。雑誌の内容は会員の日本語によるエッセイ、自作詩歌、作品の中訳日・日訳中¹⁰⁾、例会のスピーチ集及び日本語の学習教材などから構成されており、分量は300頁ほどに及ぶ。また、『友愛』第5号からは各作者のプロフィールが作品ごとに紹介されている。参考として表1に『友愛』最新号第9号の目次、作者の生年及び作品枚数を一覧表にして示す。

なお、表1にリストアップされたのは「日本語人」の作品名に限るが、ほかに台湾に滞在している日本人会員による投稿も第9号に見られた。例えば、エッセイの部には酒井杏子「『顔』は人なり」、田中繁男「蔡焜燦先生と安倍仲磨」、坂幸雄「風と虫と日本人」、出牛和夫「蟲」、平野久美子「日本・台湾 = 『水』の絆の物語」、間瀬雅美「杞人憂天」の6編、詩歌の部には李栄子「俳句」、三宅教子「フォルモサ台湾」、坂幸雄「台湾旅情」の3編、それにスピーチ集には高橋健一の「良い水をたくさん飲むと若返る」1編が集約され、従って、第9号には合計10編の日本人作品が入っていた。このように「友愛グループ」は「日本語人」だけの会ではなく、日本人との交流の場でもあり、日台の違う世代¹¹⁾ 同士のコミュニケーションを深めることに貢献している。また、『友愛』は「日本語人」の存在感のみならず、日本人の台湾観についての見解も同時に示している。

⁸⁾ 2008年6月27日「友愛グループ」幹事長張文芳より筆者へのEメールによる返答。

⁹⁾ 前掲8)、復刊第1-4号の元である第1-4号は1999年から2004年まで発行されていた。

¹⁰⁾ 但し、復刊第1-4号、5、6、7号しか載せていない。

¹¹⁾ 『友愛』第9号の作者プロフィールによると日本人投稿者の年齢層は30-70代である。

表1 『友愛』第9号 目次 2008年6月刊行（「日本語人」の投稿に限る）

項目	作品名	作者名	生年	枚数
エッセイ (同じ作者の場合、 生年は一度だけ 記す)	満州国外交大臣謝介石の一生	林富興	1924年	9
	満州国総理大臣張景恵の最後	林富興	〃	6
	禪の宴	林富興	〃	6
	「塞翁が馬」のわが青春	呉正男	1927年	8
	1960年 古きよき日本の終焉	廖繼思	1924年	20
	鬼月 (kui-geh. クイゲ)	廖繼思	〃	6
	諦めない	廖繼思	〃	8
	石炭で栄えた町 平溪	葉英晉	1931年	10
	紅・黒・離失八 警察乎我踢	劉添根	1932年	4
	ペンネーム	劉添根	〃	4
	教育現場に乱入する「モンスター親」	楊應吟	1926年	6
	海より授けられた珍味「カラスミ」	黄再城	1925年	4
	台湾の結婚風俗	劉心心	1928年	40
	ガラスの扉	劉心心	〃	8
	電話	張文芳	1929年	8
詩歌	靴	張文芳	〃	10
	桜花散りモリソン山に紅葉燃ゆ	郭振純	1925年	4
	絆	邱顏雲年	1925年	3
	笑顔	李全妃	1928年	3
	五十戸の移住 イモ、アワから米へ	林淵霖	1923年	12
	花いろいろ	林秀鸞	1922年	2
	和歌	郭振純	1925年	1
スピーチ集 (4月19日の例会 発表)	新聞事業経営の思い出	呉阿明	1924年	3
	チベットの旅	呉景祥	1928年	5
	生命は道で、運は車	李全妃	1928年	2
	膝の裏側は何と言う？	呉慧瓊	1932年	3
	幻の少女作家を追って	李英茂	1929年	3

表の作成は筆者より

5 同人誌『友愛』についての考察

考察の方法は内容分析法である。復刊第1号から最新号9号までのエッセイ数、作者数及びエッセイの内容を種類分けしたものを表2にまとめたことで、合計160編から分析することができる¹²⁾。さらに、エッセイの内容から自分史、社会、伝記、文化、歴史、言語、旅、健康及び詩歌といった9つのカテゴリーにした。このことにより、もっとも多いのは自分史に関する記述が42編で、エッセイ全体の26%を占める。なお、各カテゴリーの詳細を分析し、占める割合は、社会が32編(20%)、歴史が22編(14%)、文化が19編(12%)、言語が13編(8%)、伝記が10編(6%)、詩歌が9編(6%)、旅が10編(6%)、および健康が3編(2%)である。全体としては自分史、社会や歴史についての作品が多く書かれていることが分かる。

¹²⁾ 日本人会員による投稿はあるが、本稿は「日本語人」の書いた随筆のみを対象とする。

また、これまで発刊されてきた『友愛』（9冊）には一人で毎号のように投稿したり、各号に2編以上投稿したりする「日本語人」の作品がみられる。

表2 『友愛』第1 - 9号の集計

『友愛』	出版年月	エッセイ数	作者数	種類別の集計
復刊第1号	2007年11月	16	13	自分史5、伝記1、文化4、歴史2、社会3、言語1
復刊第2号	2007年11月	10	10	文化1、歴史3、社会3、言語1、旅1、健康1
復刊第3号	2007年11月	16	11	自分史5、歴史2、言語5、旅3、詩歌1
復刊第4号	2007年11月	25	23	自分史9、伝記3、文化1、歴史5、社会4、言語1、詩歌1、健康1
第5号	2005年1月	16	15	自分史3、伝記1、文化1、歴史2、社会6、言語1、旅1、健康1
第6号	2005年9月	18	16	自分史6、文化1、歴史3、社会5、言語1、健康1、旅1
第7号	2006年9月	17	15	自分史5、伝記1、文化2、歴史3、社会3、旅3
第8号	2007年8月	22	18	自分史3、伝記2、文化5、歴史2、社会4、旅3、言語3
第9号	2008年6月	20	13	自分史6、伝記2、文化4、社会6、旅2
		合計160編		

表の作成は筆者より

5. 1 『友愛』にみる「日本語人」の特徴

5. 1. 1 投稿者のプロフィール

『友愛』投稿者のプロフィールをみると、作者たちは全体的に1922 - 1934年生まれで、また、殆どは植民地統治時に中等教育以上の学歴を有している。さらに一部は日本留学の経験者である¹³⁾。

5. 1. 2 「日本語人」が培った日本語能力

今日、日本語能力が失われていない「日本語人」のうち、植民地時代にエリート教育を受けてきた人以外にも、幼少期から日本語能力を培ってきた人がみられる。当時、一般の台湾人は「公学校」¹⁴⁾で日本語による初等教育を受けていた。その一方で、家庭環境に恵まれたごく一部の台湾人子弟は日本人の通う「小学校」に入学することもあった。しかし、そのためには日本語能力や学力が要求される入学試験に合格しなければならなかった。このようにして、「小学校」に通った「日本語人」の日本語による表現の基礎が習得されていったものと思われる。こうした状況は以下の回顧録によく表れている。

両親は、私と二歳下の弟・哲夫に日本式教育を受けさせる為、台北市〔中略〕に在

¹³⁾ 『友愛』5号以後のプロフィールより、作者の生年、学歴及び元職業などが書かれている。最年長の「日本語人」は1922年生まれの柯徳三で、最年少は1934年生まれの張繼昭であることが分かる。また、初等もしくは中等教育を終え日本に留学したのは廖繼思、張文芳、陳火桐、吳正男、林桐龍、林淵霖の各氏である。

¹⁴⁾ 1898年台湾総督府令に基づいて、台湾人子弟が「公学校」という初等教育機関で日本語による教育を受けることになるが、国語教科書のレベルは「小学校」とは違い、台湾総督府が制作した易しい内容のものである。一方、日本人子弟が通う「小学校」は日本から送られた国内と同様の教科書である。

住の日本人の知人宅に預けられ、日本人の大正幼稚園〔中略〕に通いました。〔中略〕一九三三（昭和八）年四月一日に市内の建成小学校を受験したが、ばすせず、汽車で北投小学校（注、台北郊外にある小学校）へ通った（余初雄「私の暮らした台北」pp.54-55、『友愛』第5号）。

上述の文章から分かるように、作者余の両親が日本の教育に肯定的な態度をもったことで、余は一般の台湾人よりも早くから、すなわち幼稚園の頃から、日本の教育を受け、日本語の能力を身につけていた。したがって余と同様に植民地時代に「小学校」ないしは、中等教育以上の教育を受けていた人であれば、かなりの日本語運用能力を身につけていたであろうことが推測できる。

5. 2 『友愛』にみるエッセイの特徴

5. 2. 1 自らのアイデンティティへの問いかけ

(i) 祖父は芝山岩の第一回生で、台湾人として真っ先に日本語を習ったのですが、台湾人として自分達の母語である台湾語を忘れないように、家で台湾語を話し、台湾語と漢文の素読を学ばされていました（柯徳三「母語と外来語」pp.34、『友愛』第8号）。

(ii) 戦前の台湾の人は日本人として教育され、心の中でも台湾人であるという意識があったとしても、当時の社会環境や生活様式などで、まさに日本化したバイカルチャー台湾人であった（陳火桐「二つの名前－改姓名の思い出－」p.194、『友愛』復刊第1号）。

同化政策が行われていた植民地期に、一部の「日本語人」は学校で日本の教育を受ける一方、家庭では台湾人の生活習慣を取り入れていた。この二つのエッセイには母語の使用や台湾人の生活が保たれていた様子が述べられている。また、同化政策が執り行われていた植民地期に、学校での日本の教育と家庭での暮らしとの狭間におかれていた「日本語人」にとって、アイデンティティに葛藤が生じていたことも見て取れる。しかしながらそれと同時に、彼らは日本人としてまた台湾人として、二つのアイデンティティの間で揺れ動きつつも、結局はそれらをともに受け入れていることもうかがえるのである。

一方、日本人だと意識している「日本語人」も存在している。ここでは、問答タイプで構成されているエッセイの一つ（「信義」、『友愛』復刊第3号）をとりあげることに

する。

一台湾人だから、日本人より戦争を客観的に見れたというわけじゃなかったんですね。

一いやあ、全然。「聖戦」を疑うことはなかった。ふつうの日本人以上に日本人になりきっていたからね（呉正男、p.33）。

民族的には、もちろん作者は台湾人ではあるが、ふつうの日本人以上に日本人だという、このように「典型的日本人」ともいえるような日本人としてのアイデンティティを持つ人々さえ存在する。

5. 2. 2 植民地時代における教育体験

台湾においては、被統治者として受けた教育制度には差別があったにもかかわらず、なぜ植民地教育に対する評価が高いとされるのか。その理由の一つとして、教育熱心な日本人教師が単に知識を与えるだけでなく、愛情をもって生徒たちに接した結果、子供の人格的な陶冶に大きな影響を与えたということが挙げられる。復刊第4号「恩師との涙の別れ」では以下のように記されている。

私は学校の規則を破って申し訳ありませんでした。〔中略〕何故先生は子供たちの誰もが食べたがるざぼんの木をわざと校庭内に植えられましたか？そしてこれをとって食べたなら退学させるぞと、これはまるで学校側がざぼんどろぼうの犯人をつくらうとしているのじゃないかと考えさせられます。それで、自分がわざとざぼんをとりました。〔中略〕校長先生は、おごそかに「朱君、お前の言うことはよく分かった。お前を退学処分にはしない。教育者の我々が気が付いていなかったことをよくぞ言うてくれた。〔中略〕もっと受験勉強に身を入れて官立学校に合格出来るように努力しろ。〔中略〕しっかり勉強しろ！」と訓戒して下さいました（朱錫堯「恩師との涙の別れ」p.170、『友愛』復刊第4号）。

朱はこの事件をきっかけに向上心が芽生え、受験に全力を尽くした結果、希望の学校への進学や就職もできた。戦後、お世話になった校長先生が日本に引き揚げる際、別れの挨拶に行った作者朱は校長に人としてのあり方を教示してくれたことに対する感謝の意を述べる。彼は植民地教育を通して、知識を得ただけでなく、人生の歩みに大きな恩恵を受けたという。このほか、日本人と台湾人学生同士による揉め事があったものの、一部の教師からは平等に扱われ、「台湾人としての誇りを持ちなさい」と指導を受けた

との記述もある（柯徳三「旧制高等高校」 pp.110-111、『友愛』第6号）。

5. 2. 3 歴史認識の表出

(1) 植民地体験について

戦後60年が経過したが、私たちは『友愛』を通して統治時代の一部を知ることができる。植民地時代の初期には、台湾人による抵抗が続いていたが、日本はアメとムチの両用、つまり、抑圧や罰則ばかりではなく建設や奨励の方法をもって台湾を治めていた。その植民地体験について、「日本語人」である柯は次のように述べている。

昭和十年以前は自由思想がまだ残り、日本内地人と台湾本島人は仲良く暮らしていました。〔中略〕大戦が始まると、台湾語は禁止され皇民化運動の実施や日本式の改姓名を強いられて、戦争に協力させるため軍夫にとられ、兵役の義務も実施されました。〔中略〕明治政府は台湾の建設に力を入れました〔中略〕新聞などにも漢文欄があり、台湾在来の風俗習慣も尊重され平和な時代でした（柯徳三「母語と外来語」 pp.3-4、『友愛』第8号）。

以上のように、柯の植民地の体験から当時の社会変遷や統治法令の変革が分かる。このほか、強制ではなく、希望者で参加する「改姓名」運動について、別の「日本語人」の回顧録がある（陳火桐「二つの名前－改姓名の思い出－」 pp.191-194、『友愛』復刊第1号）。また、食糧難の戦時中に当時の台湾人は、日本人の役人から食用肉の闇売買を隠蔽するために様々な対策を駆使して栄養をつけていたという証言も述べられている（周宜炎「戦前小学校生活あれこれ」 pp.60-67、復刊『友愛』第4号）。このような歴史の証言が『友愛』では多くみられる（表2参照）。

(2) 国民党による圧制

戒厳令解除まで、台湾社会ではいわゆる「大中華思想」による中国の歴史や中華文明一辺倒で、偏った歴史事実しか伝えられていなかった。このため、公の場で存在が無視されてきた「日本語人」は戒厳令解除後に、自らの体験談をエッセイに残した。

第6号に掲載されている「軍事法廷に立って」（楊鴻儒、pp.32-47）の著者楊は元軍人であった。彼は軍人として日本語を生かし、活躍していた頃、心当たりのない冤罪（政府に不利な言論を翻訳したと言われたスパイ行為）をこうむり、軍法会議にかけられ、約7年の刑を科せられたと述べている。楊は終戦まで、中等教育を受けた「日本語人」であり、戦後中華民国の軍人として国のために尽くしてきたのであるが、冤罪により彼の人生は暗転する。

また、「日本語人」が彼らの家族が政府（国民党）による弾圧（「白色テロ」¹⁵⁾によって被害を被り、2004年になってようやく新政府（民進党）から名誉を取り戻したと劉心心が第7号の「運命の日」に記述している。

父がどの機関に、どういう訳で、何処に連れ去られたのか。私達には知る由も無く、その夜から、私達家族の父親探しが始まりました。〔中略〕あの頃、白色恐怖という言葉はまだ無く、捕まえられた人は思想犯と言われていました。思想犯の家族も同類と見られ、かかわりを持つ事は非常に恐れられていました。〔中略〕長い月日が過ぎたある日、とうとう、私達に、父との面会が許されました。判決が出たのです。あの日本留学時代の友人蕭さんが共産党なのを知っていて、活動資金を上げた、「助匪」というのが理由（pp.157-160）。

そのほか、戒厳令下での言論の制限、情報検閲の厳しさなどについての事例を取り上げた随筆もみられる。

当時（注、1970年代）台湾は戒厳令が敷かれていた時代で、電信局は警備総司令部の監督を受けており、ファクシミリのユーザーは使用した記録の控えを電信局に提出しなければならないという規定があった。〔中略〕全てのファクシミリ・ユーザーが一斉に行うのだから、その量たるや実に膨大で、あっという間に電信局はそれに対応しきれなくなっただろう。〔中略〕最初の届けよ、という公文書は見たが、届けなくてもよい、と言う公文書はついぞ見かけなかった（張文芳「電話」、pp.174、『友愛』第9号）。

民主化された今日の台湾社会では国民党の抑圧について、いまもなお語られている。『友愛』の投稿者は自らが遭遇した経験が歴史に埋もれないように、国民党の過去を公にし、またこのような理不尽な独裁が二度と繰り返されないように本誌を通して強く訴えている。

5. 2. 4 日本語人としての使命

時代の狭間に生き延びた彼らは、現在自由になった台湾社会で使いたい言葉で自己の存在をアピールできるようになってきている。さらに、自らの特技である日本語能力を活かして、若い世代の役にも立ちたいと望んでいる。以下は本節に関する一つの例を示

¹⁵⁾ 1950-53年。現在、台湾では「白色恐怖」という。

す。

台湾では英語が重要 [ママ] される中で、日本語は長い間継子扱いにされて、日陰でひっそりと生き長らえてきた。〔中略〕日本語を習いたい、習っている人が、頻繁に日本語が聞ける環境が形成されれば、進歩も早いだろう。これが古希を迎えた日本語族のせめての貢献、大げさに言えば最後のご奉公になれば幸いである（廖継思「マザータングとバイリンガル」p.76、『友愛』復刊第3号）。

作者廖は開かれるようになった台湾社会を歓迎するとともに、自らの日本語能力や日本語習得経験などを使命として次世代にアドバイスしたいと述べている。また、自らの植民地経験、戦争に巻き込まれた体験を次世代に伝えていく使命を果たそうという。『友愛』にはこのような体験談が記述されている。

6 結論

『友愛』からみる「日本語人」を輩出した要因、とりわけ、なぜ日本語を維持できたのかについては次のように要約できるだろう。それにはまず、青少年期に受けた日本の教育による影響が考えられ、さらに、差別せずに教育に力を注いだ日本人教師に恵まれたということにある。しかし、戦後、戒厳令下による規制の強化及び「白色テロ」による弾圧によって彼らの反骨精神が醸成され、公用語である中国語を話すべきはずの彼らが逆に日本語の使用意識を強めていったことがうかがえる。

台湾の歴史に翻弄されてきた彼ら（「日本語人」）は、日本人と台湾人という二重のアイデンティティに葛藤しつつも、それら二つを前向きに受け入れている。彼らは戒厳令解除後、自らが受けた植民地教育の価値観を基準に国民党政権を批判し、戒厳令期間に遭遇した理不尽な差別を訴えてきた。そして、自らが受けた植民地時代の教育及び体験を歴史の記憶に留めるべく、雑誌におけるさまざまな記事を寄せている。

主要参考文献

磯田一雄「台湾日本語文芸の「今」を考える」『大阪経済法科大学アジアフォーラム』

28、大阪経済法科大学アジア研究所、2004年、pp.2-10。

磯田一雄「初期台湾公学校の教育文化史的考察－就学率の推移とその背景を中心に」『東アジア研究』40、大阪経済法科大学アジア研究所、2005年、pp.3-17。

王育徳『台湾－苦悩するその歴史－』弘文堂、1970年。

甲斐ますみ「台湾人老年層の日本語－彼らの言語生活から－」上田功ほか編『言語探求

- の領域』大学書林、1996年、pp.105-116。
- 甲斐ますみ「台湾人老年層の言語生活と日本語意識」『日本語教育』93、1997年、pp.3-13。
- 何義麟「戦後台湾における日本語使用禁止政策の変遷－活字メディアの管理政策を中心として」古川ちかし編著『台湾・韓国・沖縄で日本語は何をしたのか－言語支配のもたらすもの』三元社、2007年、pp.58-83。
- 柯徳三『母国は日本、祖国は台湾－或る日本語族台湾人の告白』桜の花出版、2005年。
- 簡月真「共通語としての生きる台湾日本語の姿」『国文学解釈と鑑賞』70-1、2005年、pp.197-210。
- 簡月真「台湾におけるリングフランカとしての日本語」『言語の接触と混交』、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」、2007年、pp.347-390。
- 黄智慧「「ポストコロニアル」都市の悲情－台北の日本語文芸活動について」橋爪紳也編著『アジア都市文化の可能性』清文堂、2003年、pp.115-146。
- 合津美穂「日本統治時代における台北市在住「台湾人」の日本語使用－社会的変種の使用について－」『信州大学留学生センター紀要』1、2000年、pp.51-61。
- 合津美穂「日本統治時代の台湾における日本語意識－漢族系台湾人を対象として－」『信州大学留学生センター紀要』2、2001年、pp.61-77。
- 合津美穂「漢族系台湾人高年層の日本語使用－言語生活史調査を通じて－」『信州大学留学生センター紀要』3、2003年、pp.25-44。
- 孤蓬万里編『台湾万葉集』集英社、1994年。
- 呉密察・黄英哲・垂水千恵編『記憶する台湾：帝国との相剋』、東京大学出版会、2005年。
- 張嘉中『日本國政發展』台北：生智出版社、2005年。
- 張銘芳「台湾におけるポストコロニアル研究の現状と課題の一考察－陳芳明によるポストコロニアル研究の展開－」『立命館産業社会特集』39-3、2003年、pp.69-86。
- 陳芳明『後殖民台湾－文学史論及其周辺』台北：麥田出版社、2003年。
- 藤井省三、黄英哲、垂水千恵編『台湾の「大東亜戦争」－文学・メディア・文化－』東京大学出版会、2002年。
- 宮本孝『なぜ台湾はこんなに懐かしいのか－台湾に「日本」を訪ねる旅』展転社、2004年。
- 友愛グループ編『友愛』復刊第1-4号、第5-9号、2005-2008年。